慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	製品ライフサイクル論に関する一考察
Sub Title	
Author	大橋皓介 片岡一郎
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1980
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001980-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

No. 0071

学生氏名　大橋皓介
（株式会社　電通）
所属ゼミナール　滝沢　茂研

主査　片岡一郎　教授
副査　滝沢　茂　助教授
青井倫一　助教授

「製品ライフ・サイクル論に関する一考察」

本論文は、製品ライフ・サイクル（以下ＰＬＣ）研究の方法論についての文献研究である。ＰＬＣ研究を歴史的にみると、３つの段階が識別できる。典型的なＰＬＣ概念が確立した＜理論形成期＞（１９５０－６４）、実証研究と応用研究が盛んに行なわれたが、数多くのＰＬＣバリエーションが発見されることによって、結果的にＰＬＣ研究に混乱と疑問を生んだ＜理論展開期＞（１９６５－７３）、反省を通じて基礎的な理論の再構築を図ろうとする＜理論再形成期＞（１９７４－）である。ＰＬＣは「他と識別できる独立した１つの全体市場の製品全体の売上げの趨勢及びそれにともなう消費者行動・競争行動・流通形態・技術的問題の構造的変化に、導入・成長・成熟・衰退という諸段階を識別する試みである。」と定義できる。この概念が妥当性をもつためには、売上げの規則性及び諸段階が実証されなければならないが、過去の実証研究は数も少なく、研究対象製品にも偏りがある。また、ＰＬＣ概念が応用性をもつためには、段階確認の方法論が必要であるが、それもまだ確定するには至っていない。応用研究は＜予測＞、＜計画＞＜統制＞の用具として、さまざまに利用され、多くの成果を得ているが、これを実務で利用する為には解決されるべき課題が多い。今后の研究課題は、製品種類別にＰＬＣを実証的にパターン化すること、諸段階を識別する諸指標を明らかにし、その法則性を検証すること。行動科学的アプローチによってＰＬＣの発生プロセスを理論的に解明すること。製品全体のＰＬＣとブランドのＰＬＣの相関関係を明らかにすること、企業のＰＬＣの利用度を調べること、など多岐にわたる。